

春日山原始林を題材としたESDの実践

著者	大西 浩明, 中澤 静男
雑誌名	教育実践開発研究センター研究紀要
巻	23
ページ	169-174
発行年	2014-03-31
その他のタイトル	The Practice of Education for Sustainable Development about Kasugayama Primeval Forest
URL	http://hdl.handle.net/10105/9831

春日山原始林を題材としたESDの実践

大西浩明

(奈良市立済美小学校)

中澤静男

(奈良教育大学 持続発展・文化遺産教育研究センター)

The Practice of Education for Sustainable Development about Kasugayama Primeval Forest

Hiroaki ONISHI

(Seibi Elementary School)

Shizuo NAKAZAWA

(Center for Study of Education and research of Sustainable Development and Cultural Properties, Nara University of Education)

要旨: 奈良から始まった世界遺産や地域遺産を教材とした持続発展教育である世界遺産教育が、奈良市内を始め多くの地域で取り組まれるようになってきている。ただ、その取り組みが何を教材化したかという新奇性といったレベルで終わってしまっており、真に有効な学習方法について検討することはほとんど行われていない。本稿では、春日山原始林を教材として展開した授業実践をもとに、①歴史文化遺産の価値を理解させる方法、②世界遺産・地域遺産を受け継ぐ者としての当事者意識を育てる学習方法、③地域に対する愛着を養う学習方法、の3点から検討を加え、世界遺産教育にとって有効な学習方法を明らかにした。一つ目に現地学習による五感を通じた理解、二つ目に人材との出会いと共感的理解、三つ目に身近な文化遺産を教材化すること、四つ目が子どもどうしの学びあいの場面である。さらに今後の世界遺産教育の広がりに対して求められる課題を提示した。

キーワード: 持続発展教育 Education for Sustainable Development
春日山原始林 Kasugayama Primeval Forest 世界遺産 World heritage
世界遺産学習 World heritage study

1. はじめに

奈良市教育委員会では、古都奈良の文化財の世界遺産登録を機に、2001年からすべての奈良市立小学校5年生を対象に、現地見学を中心とした世界遺産学習をスタートさせた。さらに2007年からは、世界遺産や地域遺産、伝統文化や自然環境等を学ぶことを通して、地域に対する誇りや地域を大切に思う心情を育み、持続可能な社会の担い手としての意欲や態度を養う学習へと深化が図られた。

奈良市立済美小学校は、校区に奈良町の西部・南部を含んでいることから、低学年の生活科や中学年から始まる総合的な学習の時間において、奈良町を教材として取り上げた学習を展開している。

このような背景を踏まえ、本稿では、小学校5年生を対象に、古都奈良の文化財の構成要素のひとつである春日山原始林を教材として取り上げ、「世界遺産を世界遺産として守るために」をテーマに行った授業実践をもと

に、以下の3つについて検討を加える。一つ目に歴史学習を経ていない5年生に歴史文化遺産の価値を理解させる方法について。二つ目に、世界遺産や地域遺産を受け継ぐ者としての当事者意識を養う方法について。三つ目に、持続可能な地域社会の担い手の育成には欠かす事ができない地域を好きにさせる方法についてである。

2. 世界遺産教育の概念整理

世界遺産教育の提唱者である田淵(2009)は世界遺産教育は世界遺産についての単なる知識を与えるものではなく、世界遺産の価値に気付き、大切に保存しようとする態度、未来に伝える義務があるという当事者意識、そのために何ができるかという実践的な意識やスキルなど、トータルな教育を目指すものであると述べ⁽¹⁾、次の3つにサブカテゴリー化している。

2. 1. 世界遺産についての教育

田淵によると世界遺産についての教育では、「世界遺産条約が締結された理由、世界遺産の種類、サイトのロケーション、各サイトがどのような基準で登録され、そしてなぜ残ったのかを知ることが教育内容(教材)」となる。換言すれば、個別の世界遺産の価値を理解することであろう。これは本稿の検討課題の一つ目、歴史学習を経ていない5年生に歴史文化遺産の価値を理解させる方法が、これに該当する。5年生以下の児童を対象とした場合に、世界遺産についての教育を成立させるための条件を明らかにすることが求められている。

2. 2. 世界遺産のための教育

世界遺産のための教育とは「世界遺産の保存や保全に対する態度、世界遺産を守って次世代に伝えようとする当事者意識、世界遺産に対してどう振る舞うかについての倫理やモラルの教育である。」と田淵は述べている。これは本稿の検討課題の二つ目、世界遺産や地域遺産を受け継ぐ者としての当事者意識を養う方法に該当する。当事者意識を養う上で必要とされる学習活動を明らかにしたい。

2. 3. 世界遺産を通しての教育

田淵は世界遺産を通しての教育とは、「世界遺産を切り口にして、国際理解教育、平和教育、人権教育、環境教育などに迫る教育である」と述べている。これは本稿の三つ目の検討課題である、持続可能な地域社会の担い手の育成には欠かす事のできない地域を好きにさせる方法と合致するものである。世界遺産を通しての教育と地域を好きにさせることの関連性について、田淵は明らかにしていないが、持続発展教育のねらいの一つが価値観と行動の変革であることと照らし合わせてみれば、その関連は明らかである。

地域の課題を学び、理解することは大切である。しかし、理解するだけでは、課題は解決しない。行動の変革が必要である。そして持続可能な地域社会の構築のための行動化には、地域を愛する心が育っていることが不可欠である。地域を大切に思う心があってこそ、平和や環境についての学びが行動の変革につながっていく。世界遺産を通しての教育が成立するためには、三つ目の課題である地域が好きな子どもを育てる方法を検証することが重要である。

本実践においては、以上の3つを踏まえ、春日山原始林を教材に展開した。

3. 春日山原始林について

春日大社の東側に笠を伏せたような形をした御蓋山とその奥に花山(498メートル)を最高峰とする春日山が広がっている。この2つの峯のあたりは、841年に狩猟と伐

採が禁止されて以来、春日社の神域とされ守られてきた。そのため、千年以上も人手の加えられていない原生林が広がっている。これが春日山原始林である。一部にスギ、ヒノキの植栽林があるものの、春日山の3分の2を占める約300ヘクタールは、日本人の自然観や春日信仰と結びついて聖域として守られ、春日社と一体のものとして文化的景観を形づくっている。

春日山原始林はただ単に手つかずの自然が残っているというものではない。明治になるまでは春日社と一体であった興福寺には山行の役人がいて、山が崩れたり木が倒れたりしたら、木を奉納し、補植を行うという山の管理を行っていた。また、春日社では神事に用いる榊を、東大寺や興福寺では榊を花山から採っていたし、江戸時代には奈良奉行が監察を出し、一部の村に薪取りの許可も与えている。一方、江戸時代の春日社の日記には、春日奥山から柳生へ抜ける滝坂の道に関する記述に「柳生の人々は滝坂の道を通り抜けたら、肩についた木の葉、草履についた土をふるって帰った」というものがあり、春日大社権宮司の岡本(2012)は、「木の葉一枚、土一粒といえども神様の御山のものであり、春日山の木の葉や土を家に持ち帰ってはもったいないと考えられていたことがわかる²⁾」と解説している。このように春日山原始林は、山の掃除をしたり、必要最小限の恩恵に預かったりという、奈良の人々の信仰や生活との関係性の中で、全くの自然に近い状態に管理されてきたものである。

明治になって官有林となり、1889年に奈良公園の一部に編入され、1924年に「春日山原始林」として天然記念物に、1955年には特別天然記念物に指定されるなど、奈良公園管理事務所を主体に保護が続けられ、林内への立ち入りや火気の使用、動植物の採取が禁止されている。反面、明治政府が春日山の開発として道をつくったことを始めとして、1929年には観光バスのための春日奥山周遊道路の拡張工事が、また、1960年には高円山自動車道路と結ばれることとなり、観光開発と環境保護の問題も顕在化していった。

4. 学習活動の実際

1学期に世界遺産見学を実施し、なら観光ボランティアガイドの方から様々な話を聞きながら薬師寺、唐招提寺、平城宮跡、東大寺、国立博物館などをまわった。世界遺産に身近に触れることで、直感的にすばらしいものだという印象を得ることはできたようである。しかし、世界遺産に登録される根拠となる歴史文化遺産としての価値については、歴史学習を経ていない5年生にとってはまだまだ理解し得ないところがあると考えられる。

世界遺産といえども、価値が失われてしまえば、世界遺産ではなくなってしまう。奈良の世界遺産も例外ではない。子どもたちには、そうならないように、そこに住んでいる自分たちがなんとかしていかなければならないと

いう思いをもたせたい。世界遺産をこわすのも守るのも人であることを考え、だからこそ自分たちが守っていかうと具体的に行動していくことが大切であることを実感させようと考え、総合的な学習の時間に実践を展開した。

4. 1. 単元名

世界遺産を世界遺産として守るために

4. 2. ねらい

- ① 奈良の世界遺産について、意欲的な態度で見学したり、それらを守っていくための方策について積極的に考えたりする。
- ② 奈良の世界遺産を守ろうとしている人や奈良を心から愛している人が多くいることに気付き、友だちと意見を交流したりすることを通して、世界遺産を大切に守っていくための自分の考えを練り上げ、それらを分かりやすく伝えることができる。
- ③ 奈良の世界遺産のすばらしさを理解し、これらを奈良に住む者として未来へ大切に守っていかうとする意欲と態度をもつ。

4. 3. 単元計画

総合的な学習の時間全12時間

学校行事(特別活動) 6時間

第一次	世界遺産見学(1学期)……………	6時間
	事前学習……………	1時間
第二次	秋の遠足・春日山原始林(学校行事)	
	事前学習……………	1時間
第三次	保安員の方の話を聞こう……………	1時間
第四次	春日山原始林を守るために……………	1時間
第五次	古都奈良の文化財を守る……………	1時間
第六次	学習のまとめ……………	1時間

4. 4. 学習展開の概要

秋の遠足の行先を春日山原始林に決め、学校から歩いて行くこととした。乗り物を使うことなく行けるほどの距離なのだが、実際に行ったことがある子どもがほとんどいないのは、奈良の人にとって春日山は「春日さん(春日大社)の山」という意識が強く、奈良公園の一部ではあるが遊びに行くところではないという意識が働いているのかもしれない。

子どもにも馴染みのある佐保川の源流である鶯の滝で清流の美しさに感心したり、林内の静けさや空気の違いに気が付いたり、まさに五感を使って春日山原始林の価値を体感できた。普段目にするののないヒルに血を吸われたりといったこともあったが、副読本⁽³⁾に書かれている通りたくさんの種類の樹木や動物にふれることができ、世界遺産の価値の一端を理解することができた。

春日山原始林の中で手つかずの自然を楽しみながら、子どもが驚いたことがもう一つあった。副読本には春日

山原始林の自然を守るために保安員の人が働いているという記事と共に、パトロール中にゴミを拾っておられる様子の写真も掲載されている。子どもが驚いたことは、ゴミがひとつも落ちていないことだった。

4. 5. 保安員の方から話を聞く

広い春日山原始林にゴミが一つも落ちていない理由を聞くために、奈良公園事務所から保安員の方をゲストティーチャーとしてお招きし、直接話を聞くことにした。

20人の保安員が交代で、徒歩、バイク、自動車です。毎日木が倒れていないか、貴重な動植物が持ち去られていないかとパトロールをしています。徒歩なら1日8時間16kmぐらい歩きます。雨でも雪でも行きます。パトロールの途中でゴミを少しでも見つけたら、必ず持ち帰るようにしています。ひとつでもそこにゴミがあれば、次々とゴミがたまって行ってゴミだらけになってしまうからです。冷蔵庫が捨ててあることもありました。木の枝を勝手に折ったり、草花を持ち帰るようなマナーを守らない人がいたら注意したりもします。いちばん困るのは火事です。私たちのいちばんの願いは、大切に守られてきた原始林をこのままでずっと未来まで守って行ってほしいということです。

保安員の話(筆者による要約)

保安員の方の話から伝わったことは「世界遺産を守る」ということである。手つかずの自然と言えども、何もしていないのではなく、手つかずの自然の状態を維持するために、しっかりと管理しているという事実である。世界遺産の価値を失うことなく次の世代に伝えていくためには「世界遺産を守らなければならない」というメッセージが子どもにしっかりと伝わった。

4. 6. 春日山原始林を守るために

ビデオに録画した保安員の方の話を再度視聴した後、グループに分かれて春日山原始林を守る方法について話し合った。小グループでの話し合いの方が意見も出しやすく、話し合いが深まると考えたためである。どのグループでも活発な話し合いが行われ、その後のグループごとの発表では、「フェンスで囲って立入禁止にする」「保安員の人数を100人にする」「入山者の身体検査をする」といった、子どもなりに考えた意見が出された。

その日の宿題として授業の感想を日記に書かせたところ、次のような日記が見られた。

立入禁止にしたら原始林は守れるかもしれないが、それを楽しみにしている人たちまで行けなくなる。保安員さんの人数が減ってきていることから、みんなで守っていかうことが大切だ。そのためにも、ボランティアで定期的にごみ拾いに行くというのはいい

と思う。原始林の大切さをみんなに分かってもらうことは大切だが、自分たちがもっと勉強して春日山原始林のことを分らないと、ちゃんと伝わらない。だから、もっと春日山原始林のことを知りたいと思う。

春日山原始林の価値をよく理解したいという記述から、春日山原始林の保護は保安員の方に任せるだけでなく、自分たちもしなければならないという当事者意識が芽生え始めていることがうかがえる。

4.7. 古都奈良の文化財を守る

さらに保護の対象を古都奈良の文化財に広げ考えた。世界遺産がその価値を失ってしまう原因には、火事、盗難、地震、戦争など様々あるが、子どもにとってもっと身近な出来事として落書きがある。2008年にイタリアのフィレンツェ市にあるサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂に、日本人観光客が落書きをしたという記事を紹介したところ、「人類の宝物だということがわかってないのかな」という感想であったが、次に教員が撮影した唐招提寺南大門の落書きの写真を掲示した⁽⁴⁾。「どうしてこんなことをするのだろう。」「あまりにひどいし、なさけない。」と、身近な問題として捉えることができた。



唐招提寺の壁の落書き

世界遺産を守ることの重要性が十分に理解できたところで、あらためて様々な災害から守る方法を話し合った。施設や設備で守ろうとしてもそれには限界がある。世界遺産を破壊するのも守るのも人である。世界遺産を訪れる観光客、そして何よりも世界遺産の近くに住む自分たちが世界遺産の価値を知ること、そしてそれを周りの人や観光客にも伝えていくことが大切であることに気付いていった。

4.8. わたしたちにできること

学習のまとめとして、奈良に住む者として自分たちにできること、やっていきたいことをテーマに感想を書かせた。春日山原始林が近くて遠い存在であったように、身近にある古都奈良の文化財についても、「守らなければならない」という発想をもっていなかった子どもが、世界遺産を守って次の世代に伝えていくものとしての当事者意識が育っており、もっと奈良のことを知りたいと思っていること、そして古都奈良の文化財などのある奈良が好きになっていったことが読み取れる。

- ・ぼくは、絶対に世界遺産として守るために自分ができることはしたいです。ポイ捨てをしない、ゴミを拾う、落書きやいたずらをしないなど、できることはたくさんありそうです。何もかもが人の手によってこわされていくのが、自分にとっていちばん腹が立つことだからです。だから、自分にできることはしたいです。
- ・わたしは引っこしてきたけれど、今は奈良のことが大好きです。世界遺産は人類の宝物です。そんなすばらしいものがたくさんある奈良は、とてもすばらしい町です。だから、もっと奈良のことを好きになりたいと思います。そのためにも、もっと奈良のことや世界遺産のことを勉強して知っていきたいです。

5. 考察

本授業実践を本稿の3つの検討課題から振り返り、これからの世界遺産教育の授業に活かす学習方法を抽出したい。

5.1. 歴史文化遺産の価値の理解

検討課題の一つ目は、歴史学習を経ない子どもに歴史文化遺産の価値を理解させる方法である。本実践で教材として取り上げた春日山原始林は文化遺産ではあるが、子どもが感じた価値は、自然環境に関するものであった。現地に足を運んだだけでは、興福寺や春日大社の信仰との関係性といった、春日山原始林の歴史文化遺産としての価値を理解するところまで至ることはできないであろう。自分が本物にふれて五感を通して理解するという現地学習と、歴史文化遺産の価値を熟知し、その保護に日々関わっておられる方から直接話を聞くという学習を組み合わせることで、子どもの理解を深めることができる。現地見学は重要であるが、残念ながら1回限りである場合が多い。それに対してその保護に関わっておられる方は、歴史文化遺産と日常的に接しておられる。その体験を踏まえた話が現地学習で得た感覚と合わさったときに、歴史文化遺産の持つ価値を納得し、理解できる。

5.2. 当事者意識を養う

二つ目の検討課題は、世界遺産や地域遺産を受け継ぐ者としての当事者意識を養う学習方法である。本授業実践を通して明らかになったことが二つある。一つは人物との出会いであり、二つ目に身近さである。

一つ目の人物との出会いである。今回は春日山原始林をパトロールされている奈良公園事務所の保安員の方との出会い、日ごろ思っておられることを直接うかがうことができた。子どもは秋の遠足で春日山原始林を歩いているので、毎日パトロールすることがどれだけ大変なことを実感できており、そのような苦労をふまえた話は子ども

もの心をつつ。この人と人との直接的な出会いによる共感的理解こそが当事者意識を育てるのである。

二つ目の身近さである。そのことはフィレンツェでの落書きと唐招提寺の落書きを伝えたときの子どもの反応の違いによく表れている。フィレンツェの落書きはどちらかという他人事であったのに対して、唐招提寺の落書きは自分事として子どもは受け取り、いきどおりを感じていた。唐招提寺の落書きの多くが、子どもの手のひらによるものであるという事実から、その面白半分に行った落書きの場面が想像できたことであろう。

5.3. 地域に対する愛着

三つ目の検討課題は、地域を好きにさせる学習方法である。授業後の子どもの感想に奈良のことが好きになったというものがたくさん見られた。しかし、学習前から好きであったのか、この学習をしたから好きになったのかはわからない。しかし、この学習がもとからぼんやりと抱いていた地域に対する愛着を、はっきりと意識化する上で有効であったことは事実である。この地域に対する愛着の意識化に有効であったと思える学習が二つある。一つは現地見学であり、もう一つが話し合いである。

一つ目の現地見学についてであるが、現地で五感を通して感じたからこそ、よさを納得したという側面もあるが、学校から徒歩で現地を往復したということが、地域への愛着に結び付いたと考える。徒歩で行ける範囲こそが、子どもにとっての地域である。バスなどに乗っていく方が簡単ではあるが、それでは身近な地域という感覚は得られない。歩いて行けるところであるからこそ、春日山原始林の抱える課題が自分事になったのである。このことから、歴史文化遺産を教材化するにあたっては、有名なものを取り上げるよりも、身近なものを取り上げる方が地域に対する愛着を養ううえで効果があることがわかる。当事者意識の養成ともかわり、地域を教材化することの重要性が明らかにできたと思う。

二つ目の話し合いについてである。本授業実践では子どもどうしの話し合いの場面を多く持つことを心がけた。一斉指導だけでなく、小グループによる話し合い活動を多く取り入れ、応答的な話し合いが活性化できるように配慮した。友達が奈良や地域に対して抱いたイメージを聞くことで、自分のぼんやりとしたイメージが明らかになると考えたからである。授業場面では、感じていたことが同じであることがわかり、グループ内で盛り上がっている場面もよく見受けられた。

6. 終わりに

本稿では、古都奈良の文化財である春日山原始林を取り上げ、「世界遺産を世界遺産として守るために」をテーマとして行った授業実践を通して、三つの検討課題を提示し、それに対する考察を加えることを通して、世界遺

産教育における有効な学習方法を明らかにしてきた。一つ目に現地見学での五感を通じた理解であり、二つ目に人材との出会いと共感的理解、三つ目に身近な文化遺産を教材化すること、四つ目が子どもどうしの学びあいの場面である。

世界遺産教育は世界遺産をツールとした持続発展教育である。世界遺産についての知識を与えることが目的ではなく、持続可能な社会づくりの担い手を育てることが目的である。そのことを意識するならば、世界遺産よりも身近な文化遺産を教材として取り上げることはより重要である。身近な文化遺産を取り上げて学習することで、その文化遺産に関わっておられる身近な人材との出会いがある。子どもは文化遺産の保護に努力されている姿を見て尊敬したり、あこがれたりする。子どもの学習を目の当たりにされた地域の方は、子どもの成長に期待することとなる。この尊敬と期待という双方向的な関わりが、地域社会における人と人のつながりをつくっていく。地域社会の一員であるという自覚は、文化遺産を保護していく当事者意識と重なり、ずっと住み続けたいくなる地域、持続可能な地域について考えるきっかけとなっていく。そして何よりも大切なことは、文化遺産を切り口に地域について関心を持ち続けていくことであろう。

本実践の終末になって、「奈良の世界遺産のことをもっと知らなければならない」「たくさんの人に奈良の世界遺産のことをもっと分かってほしい」「もっと奈良のことを勉強して奈良のことを好きになっていきたい」などの意見が多く見られるようになった。この子どもの思いを一過性のものとしなないためには、各学校における学年進行を意識した系統的な指導計画が必要であり、現在のところ一人一人の教員が持っている地域の文化遺産や人材に関する情報を共有化すること、また効果的な指導方法について相互に検討を加えていく研修も必要になっていく。さらには、小学校だけでなく、幼稚園や中学校との連携、地域の公民館等の生涯教育とも連携することで、未来の地域の担い手を一貫して育てていくことができると思う。

奈良から始まった持続発展教育としての世界遺産教育について、その学習内容、学習方法、連携・交流などに関わって研究していきたいと考えている。

注

- 1) 田淵五十生「世界遺産教育とその可能性-ESDを視野に入れて-」『国際理解教育VOL.15』日本国際理解教育学会、2009年、pp.97-101
- 2) 岡本彰夫「世界遺産古都奈良の文化財」『学べる！世界遺産の本 奈良』中澤静男・祐岡武志監修、京阪奈情報教育出版株式会社、2012、pp.68-70
- 3) 『奈良大好き世界遺産学習』新しい世界遺産学習構築のための検討委員会監修、世界遺産学習資料作成委員会編集、奈良市教育委員会、2008年

- 4) 現在は修復されている。以前は、南大門の柱の朱を手付け、白い壁に手形を押しとみられる落書きがひどかった。